

全国大会報告

日本色彩学会第47回全国大会〔名古屋〕'16 開催報告

Report on the 47th Annual Meeting of the Color Science Association of Japan, Nagoya 2016

第47回全国大会〔名古屋〕'16 実行委員会

日本色彩学会第47回全国大会〔名古屋〕'16は2016年6月4日(土)、5日(日)に名城大学の天白キャンパスにて開催された。研究・作品発表70件に加え、企業展示は18件という多数のご協力をいただき、また、参加登録者数は約250名、招待者や出展・現地スタッフを合わせると300名以上が集い交わる活気ある2日間となった。「自然の光、人工の光」という大会テーマに沿って、青色LEDと緑色のホタルという異色の組合せで、この地・この季節ならではの特別感を演出し、会期中は香り高いドリンクやカラフルメロンパンを楽しんでいただきながら、2日目の「匠の技に学ぶ」企画へと繋いで仕上げ、大会全体に彩りを添えた。海外から参加の方々も一緒に「年に一度のお祭り気分」を共有することができ、記憶に残る大会になったのではないと思う。スポンサー企業、地元ベーカリー、会員有志グループはじめ大勢の方々によるさまざまな形のご協力に心から感謝しつつ、次の大会へとバトンを繋ぎたい。

(川澄未来子)

○1日目：特別企画「自然の光、人工の光」

会場である名城大学と6月の季節にちなみ、2014年ノーベル物理学賞受賞の青色LEDと蛍を題材に「自然の光、人工の光」と題して講演が行われた。

名城大学 吉久光一学長の挨拶で始まった講演会は

会場であるA会場が多くの人で埋め尽くされ、講演内容に興味深くうなずきながら話を聞く姿が見受けられた。

第1講演者である豊田合成株式会社 太田光一特別顧問からは赤崎教授や天野教授と開発をともにした青色LEDについて、LEDの発光のしくみや開発の歴史、さらには研究者としての知的財産に対する考え方で、現物や事例を交えながらユニークに講演がなされ、会場からは何度も笑いがおきた。第2講演者である東京ゲンジボタル研究所 古河義仁代表の講演では、昆虫の鮮やかな色彩、ホタルの生態や発光のしくみ、その美しさを紹介してくださるとともに、ホタルの暮らしやすい里山の保全についても話をいただき、会場からため息が聞こえるほど深く感じさせられる講演内容であった。

(渡邊千穂)

○1日目：特別企画に連動した交流会

1日目の夜、名城大学から地下鉄で一駅離れた緑豊かな森、尾張徳川家の祈願所 八事山興正寺にて交流会を開催した。境内を自由散策後、18時から交流会会場「大書院」に入室。葵の御紋が欄間に彫られた120畳の和室に丸テーブルを配し、手延べガラス越しに、これまた葵の御紋が描かれた枯山水の庭園を観ながら着席形式で行われた。



図1 太田光一氏による青色LEDの講演



図2 古河義仁氏によるホタルの講演

18時半、中村信次実行委員の司会により開会。川澄未來子実行委員長による歓迎の言葉に続き、淵田隆義色彩学会会長のご挨拶のあと、タイからの参加者 Chanprapha Phuangsuwan 氏の音頭により、参加者104名がタイ語で乾杯！

海外からの参加者4名を含む男性7名、女性25名ほどが浴衣や作務衣で参加され、会場は華やいだ。

ヤゴト千歳の会席膳に生酒やビール等をいただきながら歓談し、海外や全国からの参加者と親睦を深めていった。会食中、興正寺僧侶からご講話をいただき、仏教における放生会の意味(生き物の命をいただくことに対する感謝で自然に返してあげる)などを伺った。

初夏の長い日が暮れた20時、いよいよホテル観賞が始まった。ガラス戸が開けられ、特別講演講師の東京ゲンジボタル研究所 古河義仁代表の誘いでホテルを呼び寄せ、月見台から庭に下りて鑑賞。和風庭園に放たれた150匹のホタルが緑の光を放ちながら幻想的に舞う姿に魅了された。

ホテル観賞を楽しんだ後、秋の研究会大会 土居元紀実行委員長、来年度全国大会 大関徹実行委員長のご挨拶を終え、閉会した。

初夏の風物詩、ホテルと浴衣が相乗効果をもたらし、

海外からの参加者にも日本のおもてなしと風情を感じていただくことができた。会場は歓喜に沸き、交流会は大盛況であった。(ながなわ久子)

○2日目：ランチョンセミナー「先人の知恵、匠の技に学ぶデザイン思考」

2日目の12:45より株式会社オフィス・カラーサイエンスの支援を受けたランチョンセミナーが開催され、京都工芸繊維大学伝統みらい教育研究センターシニアフェロー西本博之先生を迎えて、『科学と芸術の融合』をテーマにした講演が行われた。1日目から提供されたメロンパンと同様、Chignon(シニョン)から提供されたカラフルなランチボックスと手作りの箸袋は好評で、ほぼ定員数の参加者で会場がにぎわっていた。講演は1日目から行われたメロンパンアンケートの種明かしの一端を担っており、「ストラテジーのないものをアートとよぶ」との提言から始まり、伝統みらい教育研究センターと本セミナーの開催を後援した濱田泰以センター長の紹介、今大会の各種デザインやロゴへの感想と展望、無意識や輪郭などのキーワードを用いたデザイン思考についての説明がなされた。話題は多岐にわたり、質疑応答の時間には各分野の参加者から意



図3 浴衣で会場に向かう参加者



図5 西本博之氏によるランチョンセミナー



図4 ホテル観賞前の僧侶による講話



図6 セミナーに引き込まれる参加者

見や感想が提示され、活発な議論が行われた。その際、西本先生より一人ひとり耳を傾ける話題は異なるとの示唆があったが、色彩学会は大学や研究機関、色彩を扱う実務者など広範囲にわたる参加者で構成されているため、聴講者それぞれにとって興味深い講演であったと思われる。(山岸未沙子)

○ 口頭発表A会場

A会場は、大会のメイン会場として、6月4日(土)と5日(日)の両日に渡って、ほぼ終日、総会、口頭発表、ポスター・ショートプレゼンテーション、企業プレゼンテーション、特別企画、ランチョンセミナーなどのプログラムが組まれた。ここでは、口頭発表に関して報告する。

初日の4日は、1A「照明」(4件)のセッションが組まれ、照明による美術作品の色の再現性の問題や、色光の選好と皮膚温変化などが報告された。

2日目の5日には、2A「色覚」(5件)、3A「景観」(4件)、4A「室内環境・テクスチャー」(4件)の3セッションが組まれた。2Aでは輝度コントラストの弁別感度や2色覚者の色弁別特性などが、3Aでは景観の色彩規制の問題や路面のカラー舗装の課題などが報告された。

また、4Aではインテリアファブリックのシミュレーションと実物との印象の差異の問題や給食用トレイの色と美味しさ感の関係などの色の心理影響が報告された。

口頭発表は、発表10分、質疑5分の計15分間で進められたが、活発な質疑のため、座長が進行に苦慮する場面も窺えた。(原田昌幸)

○ 口頭発表B会場

B会場においても、A会場と同じく、6月4日(土)、5日(日)の大会会期中、口頭発表およびポスター・ショートプレゼンテーションが行われた。

初日4日は、9件のポスター発表のショートプレゼンテーションに続き、1B「色知覚と身体反応」のセッションにおいて、色彩の知覚やその運動能力・反応時間に及ぼす影響に関する4件の口頭報告がなされた。

翌5日には、ショートプレゼンテーション(9件)の他、主に画像解析的手法を用いた研究報告がなされた2B「色と光の分析」(6件)、肌や宝石、特殊な塗装面などに対する先端的な計測手法が提案された3B「測色・コスメティクス」、国際比較や文献調査に基づく色彩教育史などの報告がなされた4B「歴史・文化」(4件)の口頭発表セッションが開催された。



図7 ランチョンセミナー連動企画のカフェスペース



図9 口頭発表会場の様子



図8 カラフルメロンパンは30種類



図10 熱心に耳を傾ける聴講者

いずれのセッションにおいても、バラエティに富んだ発表がなされており、色彩学研究の幅広さを再確認することができた。座長の適切な働きかけで、質疑の時間も大変充実したものとなり、フロア参加者にも十分満足できる研究発表の場となった。(中村信次)

○ポスター会場

本大会のポスター会場は企業展示コーナーに隣接し、受付を済ませた参加者が直ぐにアクセスできる良い場所であった。衝立を並べた教室後方にも大きく解放できる扉があり、受付側の隔壁を取り払った効果と相まって、明るく開放的で快適な空間が提供できたように思う。また企業展示とポスター会場を同一会場としたレイアウトも大変好評であった。

ポスター発表は、通常のポスターセッションと、口頭で簡単な概要をプレゼンするショートプレゼンテーションの2部構成とした。

ショートプレゼンテーションはポスター会場ではなく、2日間に渡ってA会場とB会場で実施した。1人あたりの持ち時間が3分と短いため、プレゼン資料はPDFのみとし、事前にプレゼン資料をデータ受付のPCへコピーしてもらった。また発表者交代が最短で済むように、持参PCの使用は不可とした。これらの工夫により、特に遅延を生ずることなく、ショートプレゼンテーションを実施することができた。

ポスターセッションは、45分間の責任発表時間を設け、ポスターの前に立って研究発表する形式とした。今大会では、隣り合うポスターがなるべく近い研究分野になるようにポスター番号を割り振り、責任発表時間をひとつおきに(1日目と2日目の発表を交互に)配置するのではなく、衝立の片側が1日目の発表、裏側が2日目の発表となるように配置した。また聴講者が

ポスターを見て廻るスペースを確保するため、隣り合う衝立の間に80センチほどの隙間を確保した他、1日目と2日目で衝立の位置を前後に50センチほど移動させるなど工夫を凝らした。ポスター会場はいずれの時間帯も盛況であったが、会場内を見て廻るだけの空間的な余裕は確保されていたように思う。(坂本 隆)

○企業展示会場

本大会も企業展示は18社の多くの企業に出展していただいた。6月4日(土)、5日(日)の二日間にわたって多くの方々にご参加いただき、企業の新たな発想で作られた様々な製品を興味深く聞く姿も多く見受けられた。会場はエントランスホール(総合受付)に面する教室の壁を取り除き、広々としたオープンスペースとして、ポスター展示と併設する形で開催された。受付から一目で展示会場が見渡され、非常に入りやすく出展者の説明も聞きやすい環境であった。企業プレゼンテーションにおいて、各種製品のPR紹介がなされ、より一層展示会場では情報交換など活発に行われていた。

今大会の出展企業は、色彩計や輝度計、分光測色計などの最新タイプの光計測器系の展示をされた企業が多く、他にもスペクトルカメラ、イメージングカメラ、シミュレート光源、人工太陽照明灯など、機器の紹介や、光学解析ソフト、デザインソフト、名古屋の伝統色の紹介、色彩の教材、色弱模擬フィルタ、色と光と安全の紹介など様々なメーカー企業が参加された。多くの研究者にも欠かせない計測機器などのハード・ソフト製品が展示され、研究者と各企業の製品技術の融合の一助になったのではないかと感じている。

最後になりましたが、出展された企業・団体の皆様に、心より感謝申し上げます。(池田典弘)



図11 ポスター会場の活気



図12 企業展示会場の賑わい

○ 大会ヴィジュアルデザイン

本大会を盛り上げるため、ロゴマークをはじめとしたビジュアルアイデンティティを作成した。ロゴマークは、テーマ『自然の光, 人工の光』にちなみ、色彩や形状などで「光」を表現した。色彩は、スペクトルを示す7色を基本としつつ、本大会にまつわる事柄と関連付けて各色彩を設定し、「今」を表した。色彩の配置は、PCCSによる色相環に対応させた。形状は、7つの三角形のパーツで構成される単純な七角形とし、「光」に漢字にも読み取れるような主観的輪郭線を用いた。

ポスターは、本大会を象徴したロゴマークに基づき、大胆な構図と文字色とのコントラストに配慮し、視認性を担保した。ポスターは、ホームページやニュース、学会誌に掲載したほか、全国大会当日の会場での掲示も行い、本大会の周知を図った。

当日の会場には、ロゴマークに基づいた様々なサインを配置した。ニュースに掲載したタイムテーブルと対応付けた会場案内や、ロゴマークで用いた三角形のパーツを組み合わせてデザインした矢印などを用い、整合性を図った総合的なサインを設けた。

そのほか、ロゴマークをモチーフにしたうちわなどノベルティ制作も行った。ノベルティは参加者に大変好評で、熱気に満ちた発表会場には、涼やかな風を運び、蜩舞う交流会場には、粋ないろどりを添えていた。本大会の記念として大会終了後も手元に置いていただきたい。

多くの参加者のみなさま・スタッフの尽力で、光溢れる全国大会になったことを御礼申し上げる。

(牧野暁世)

○ 式典

大会の最後には式典が開催され、学会賞、論文賞、研究奨励賞および発表奨励賞の授賞式、秋の研究会大会と次回全国大会の紹介、新役員の紹介、今大会実行委員長の挨拶が行われた。第20回学会賞は、本学会名誉会員で文化学園大学名誉教授の北島 耀先生に授与された。表彰後、ご本人からこれまでの足跡を振り返りながら、色彩学会と色彩分野の発展に向けて今後の抱負が熱く語られた。論文賞は、柳田拓人氏らによってColor Research and Application Vol.40 No.5に掲載された「Color Scheme Adjustment by Fuzzy Constraint Satisfaction for Color Vision Deficiencies」に対して、



図13 立て看板



図14 会場に貼られたポスター



図15 メロンパンのディスプレイ



図16 オリジナルうちわ

研究奨励賞は Color Research and Application Vol.40 No.3 に掲載された「Color Naming Experiments Using 2D and 3D Rendered Samples」の著者 田中 緑氏に授与された(当日ご本人欠席のため、共著者の堀内隆彦先生が代理授与)。また、本大会における発表奨励賞として、口頭発表については 1 B-1「色の三属性が自然画像の弁別と許容に与える影響」を発表した濱田一輝氏と、2 B-3「太陽光による退色劣化とその逆変化過程の画像シミュレーション」を発表した森脇淳史氏に、ポスター発表については P-10「混同色線理論に基づく白色光による色覚バリアフリー照明の検討」を発表した後河内鉄氏に授与された。各受賞者からはそれぞれの研究に

おける苦勞話や今後への熱い想いが語られた。その後、大阪電気通信大学の土居元紀先生より秋の研究会大会が11月26日、27日に大阪電気通信大学駅前キャンパスで、また、文化学園大学の大関 徹先生より第48回大会が2017年6月に文化学園大学において開催されることが紹介された。次に、壇上で新たな役員の名簿が紹介され、第1回理事会にて新会長に高橋晋也理事、新副会長に岡嶋克典理事と酒井英樹理事が選任されたことが報告された。最後には川澄未来子実行委員長による閉会の挨拶とともに本大会に参加された方々への感謝の辞が述べられ、盛況のうちに本大会が終了した。

(東 吉彦)



図17 学会賞受賞の北畠 耀氏



図18 発表奨励賞受賞者
濱田一輝氏 森脇淳史氏 後河内 鉄氏